

読書のすゝめ

「読書の習慣を身に着けることは、人生のほぼ全ての苦難からの避難所を自分自身のために作ることである。」

ウィリアム・サマーセット・モーム

冒頭の一節ですが、「月と六ペンス」などで有名なイギリスの小説家ウィリアム・サマーセット・モームが「読書」に関して残した言葉です。ちなみに、「月と六ペンス」は、フランスのポスト印象派の画家ポール・ゴーギャンをモデルとした小説で、架空のある画家の生涯を通して「人生」というものを深く考えさせてくれる一冊です。

さて、例年10月27日から11月9日までの2週間は、「秋の読書週間」です。近年、コンピュータゲームやSNSの影響などによる若者の「活字離れ」が叫ばれ、例えば、国の統計では、高校生の約半数が1か月に1冊も本(教科書等を除く)を読まないとのこと。一方で、若者の「活字離れ」については、それに反する見解もあり、その実態は定かではありません。いずれにしろ、20年くらい前までは、電車内で文庫本などを読む人がかなりいたものですが、近年は、若者だけでなく、ほとんどの人が車内でスマホやタブレットを操作しており、個人的には「活字離れ」を実感する日々です。

とは言え、自分の時間をどのように使うかは個人の自由であり、他人がとやかくいうことではありません。ただ、一つ言えることは、読書は、自己の見識を広げ、人生をさらに豊かにしてくれるということです。モームが「人生のほぼ全ての苦難からの避難所」といった意味も、もとより何かハウツー的なことを指しているのではなく、読書によって人間性が陶冶されるという趣旨と考えられます。

また、フランスの小説家・オノレ・ド・バルザックは「読書は私たちに未知の友人をもたらす」と述べ、ドイツの哲学者アルトゥール・ショーペンハウアーは「作品は著者の精神から抽出されたエッセンスである」とも語っています。人が一生の内に出会える人の数は時間的にも限られていますし、類のない賢者に出会える機会はさらに少ないものです。一方、本は好きな時に読め、時空を超えて、様々な賢者の思想等に触れることができるわけで、これらの格言はまさにこのことを物語ったものではないかと思います。

読書とは、単に情報を入手するだけのものではなく、自分とは違う価値観に触発され、あるいは自分に欠けた何かを補完し、モームが言う如く自らの精神的苦衷等を救うような役割を果たしてくれるものです。また、自分でも気付いていなかった自らの可能性や未知の自己を発見することができるかもしれません。

冒頭で、若者の「活字離れ」のお話をしましたが、読書習慣は、一般的に子供の頃から身に着けるのがよいとされています。一方で、「人生100年時代」と言われる今日においては、子ども以上に大人こそ、読書の習慣がますます重要になってくるのではないのでしょうか。また、読書には、認知症に繋がる認知機能低下の防止などに有効との研究成果もあります。秋の夜長、しばらく読書をしていない方は、この機会に何か気になる本を手にとってみたらいかがでしょうか。

(文中敬称略)

令和5(2023)年10月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明